
キモノノケモノ ～白い髪～

白いウサギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キモノノケモノ　　＼白い髪＼

【Nコード】

N9682V

【作者名】

白いウサギ

【あらすじ】

中学生最後の夏休み。雪駄は単衣という「キモノケ」の存在と出会う。

彼女に興味を引かれたのか違うのか。雪駄は東京の高校ではなく、祖母と単衣が住む町、三塚へと進学を決めた。

そんな彼の高校で最初の夏休み。雪駄は高校で入部した「オカルト研究会」の

課題で、町から離れた場所にあるお化け屋敷へと向かった。

そこは見つけると必ず呪われる、白い髪の人形があるという噂が

あった。

※自身のブログでも連載しています

始まり始まり

—教えてほしい。君はだれだ？

うだるような暑さは7月に入っただけというのに一日中俺の周りを漂い、それは本来涼しくなる夜中にも俺を襲った。中学校最後の夏休み。高校受験を来年に控えた俺は、「勉強に集中する環境へ」という名目で、田舎にある祖母の家に来ていた。

祖母の家は小さいながらも江戸時代から続く老舗の呉服問屋であり、今でも店の中には数多くの浴衣や襦袢、花嫁が着る着物なんかも並べられてある。

俺の両親も父はスーツ会社に勤めているサラリーマンで、母は女性服のデザイナーをしているのだから、つくづく「服」に縁のある家系だと思う。

そんな服に囲まれた家族を持つ俺——袴田雪駄は、こちらに来て三日は経つが、祖母の店の手伝いで一日があつという間につぶれ、未だに参考書どころかシャープペンの一本も触れていない状況である。この時期は近くの市町村で祭りが多く開催されるため、夏祭りに着る着物の着付けや準備、はたまた修理など、注文がかなり多く入ってくる。

当然、既に70を超えた祖母には猫の手も借りたい時期であるのだ。そんなわけで、俺はかなりの報酬に加えて祖母の料理を目当てに、毎年夏休みを利用して、手伝いに来ているのだ。

まあ、親からは勉強はどうしたなどと小言を言われるかもしれないが、こんなことは毎年恒例となっているのだから、今更変えようと思って変えられるものでもない。

人には人のリズムというのがあるのだ。勉強するなら祖母の家に行くよりファミレスの方に行く。

そうして今日も社会勉強に一日を費やした後、布団にもぐりこんだが一向に眠れなかった。

まあ、毎年毎年「今年は暑いね」とは言っている筈だが、あえて言わせてもらう。今年はホントに暑い。

特に7月に入ってから初めての熱帯夜だそうで、いつもならクーラーどころか扇風機すらいらぬ夜中でも酷く汗をかく。

最も、祖母は大の冷房嫌いなため、家には扇風機しか置かれておらず、店の中に一つだけついているだけだ。

そんな日に限って、辺りに生えた木からは蝉がけたたましく鳴いていて、俺をどうしても眠らせてはくれなかった。

イヤに頭が覚めた。無理やり目をつぶっても、瞼は自動ドアの如く開いてしまった。

結局、この日は一日中眠れなかった。だがその原因はうっとおしい蝉の音でも、むんむんと籠る暑さの所為でもない。ましてや隣の部屋から聞こえる、祖母の変な寝言でもなかった。

枕元に少女が立っていた。

その夜はとりわけ、月が明るく出ていたわけでもなく、目が慣れていたとはいえ、部屋は真っ暗な夜の黒が部屋を覆っていた。にも関わらず、その少女の白い顔ははっきりと俺を真正面に向いていた。白く、小さい顔は化粧でもしているのかきっちり整っていて、

おかっぱのように見える髪は部屋に染み込んでいる闇と同じ様に黒く、輝いている。

そして少女が身に着けている紅い着物が嫌でも目に入って来た。ふと、映画や漫画なんかに出てくる、日本人形が頭をよぎった。

一メートルも離れていない距離であるのに、その少女の存在は遠くに感じられた。

小さい。身長は140センチあるかないか。歳は化粧を付けている所為かよく分からないが12、いや11？流石に13はないだろう。顔中に汗が伝うこの状況で、俺は一目見た瞬間にこう思った。

こいつ、「人間じゃない」

そんな事をぼんやりと考えていると、少女は一步、前へと踏み出してきた。

俺は情けなくもビクツと体をそらしてしまったが、布団の上に移動した少女が裸足なのは分かった。

「君は誰だ？」

見た目は俺よりもはるかに年下なのに、いやに大人びた口調で喋ってくる。

最近の子供ってこんなもんなのか？ゆとり教育の影響なのか？年上の方には敬語使えと習わなかった？

そもそもナニモノだ？

「いや、お前こそ誰だよ」

思わず聞き返してしまった。

辺りが一瞬静まり返る。さっきまでミンミンとうっとおしく鳴いていた蝉もこんな時に限って鳴くのをやめている。

やってしまったか。俺が読む漫画のキャラは「質問を質問で返すなッ！」と言っていたが、なるほど、確かにその通りだ。かなり失礼だ。

そう思っていると、少女は「ふむ．．．」と顎に指をつけて考える素振りを見せ、

「なるほど、名を尋ねるのだから、先にこちらから名乗るのが礼儀だったかな？」

何故か質問するかの様に呟いた後、さっきと同様に俺の目をジッと見つめながら少女は名乗った。

「名は単衣。この家の主は私の事をそう呼ぶ」

単衣．．．って、着物の名前じゃん。というよりも、「家の主」？祖母の事を言っているのか？

俺が無言のまましていると、単衣と名乗ったその女の子は、さらに一步、俺の前に近づいてきた。

それに気付いて体を反らした俺の目の前に、雪のように白い顔が寄ってきた。

夜中だが、いや、夜中だからなのか、整った顔は映えている。

それに目は少し細めだけど、長い眉毛と合っていて具合がいい。

あと5年経てばすんごい事になるぞと思っていると、女の子がこちらを睨むようにジーっと見てきた。

「え．．．なに？」

「私は君に名乗ったのだ。だったら君も名乗るのが礼儀なのではないか？」

叱られた・・・こんな夜中、しかも子供に・・・まあ確かにそうか。単衣ちゃんの言う事はもつともだ。

「あゝえっと・・・雪駄せったね？袴田雪駄。一応この家のばあちゃんの孫なわけなんだけど」

「ふむ、では君・・・雪駄は主と縁のある者なのか？」

「縁って・・・まあ、そうなるわけだけど。そういう単衣ちゃんは・・・誰？人間じゃないよね？」

あ、言っちゃった。自分でも驚くほど直接的に聞いちゃった。でも俺の頭には確信に近いほど、答えは出ていた。

こんな夜更けに着物を着た少女。それだけならまだしも、半そで短パンの俺でもダクダクと汗が出てきているのに、汗一つ掻かない奴はどう考えてもおかしいだろ。

目の前に立つ少女は再び顎に指を当てながら少しの間だけ目を瞑った後、俺に答えを返してきた。

「君の言うように、私は人間ではない。私は『キモノケ』だ」

予想とは少し違った答えを言ってから単衣は、フツとほほ笑んで俺の前から消えた。

単衣の笑顔の所為か、それとも単に俺の頭の具合の所為なのかは分からない。

翌年の冬、俺は祖母の家から通うという事で、新しさと古さが混ざり合った町、この三塚町の高校へと進学を決めたのだった。

始まり始まり（後書き）

どうもこんにちは。

白いウサギと申します。

小説家になろうで初の連載作品を書こうと思ひまして、
以前短編で書かせてもらったものを元に作成しました。
更新はあまり早くないとは思いますが、一人でも多くの方に
読んでもらえることを願っています。

感想、ぜひお願いします

一歩目 「雪駄の課題」 (一)

「洋介ーッ！！ピザが届いたわよ！降りてきてー！」

下の方から母さんの声が聞こえてきた。僕は部屋に置いた段ボール箱を足で隅っこに寄せると、薄い木のドアを開いて息を吸った。

「分かったよーッ！ちよっと待ってて！」

母さんに声が届いたかは分からないが、ピザを食べるのはもう少しだけ待っていて欲しい。もう少しで捨てるモノがまとまるので、一階に降りるついでに持っていきたいのだ。

机の上に置いたゴミ袋には、いらなくなった教科書やら紙屑、それに既に聞かなくなったCD何かが入っている。CDが燃えるか燃えないかは知らないが、とにかくいらぬモノはどんどんゴミ袋にほおり込んでいたので、空のペットボトルも入ってるかな。この部屋にはもう時計がないから携帯をポケットから出して開けてみる。

液晶画面に映された数字は、「20..24」となっていた。

今年の春、僕は無事高校を卒業して、東京の大学に行くことになっていた。残念ながら志望校には入れなかったが、なんとか滑り止めに受かった。親はもう一年浪人していいとは言ってくれたが、僕としてもこれ以上の受験勉強はコリゴリだったわけで、別段理由もなく受験した大学へと進学を決めた。今日は東京で借りるアパートへ荷物を送るため、長年使っていた部屋の整理をしていた。

残り少ない春休みを一日丸ごと使って片付けた部屋は、塵々していたガラクタやマンガや服なんかが無くなり、床には埃とノートの切れ端が散らかるだけの殺風景な部屋に変わっていた。文字通り、

腐るほど物があつたのだが、一人暮らしをするために送る荷物をまとめると、大きな段ボール箱一つと、小さめの箱一つで十分間に合った。むしろ捨てる物の方が容量が多い。着なくなったシャツやマンガ雑誌などを一階に運ぶのに、階段を何往復したか分からない。それもようやく終わりそうだ。やはりこういうのはしつかりと終わらした方が気分が良い。僕が好きな、パイナップルが乗ったハワイアン・ピザも美味しくなるといふものである。

僕は床に散らばった紙くずをゴミ袋へと素早く入れた後、まだ床に散らばっている紙を拾おうとしゃがみこんだ。するとカタツと軽い音が部屋に鳴り響き、机から僕の目の前に、何かが落ちた。自然と目がそちらを向く。床には30センチほどの大きさをした人形が転がっていた。

ああ、これは・・・

僕はゴミ袋を一旦床に置くと、足もとに倒れた人形を拾い上げた。箱に入れたと思っていたのだが、うっかり忘れていたようだ。

それは白い髪をした、黒いワンピースを着た人形。

名前は「アリス」。僕が拾ってきた人形だ。

2年前、いや、去年だったかな？僕が家に帰っていた途中、公園のゴミ捨て場でアリスを拾ったのがきっかけだった。その時は泥にまみれて酷く汚れていたが、何を思ったのか、当時の僕はそんな人形を拾って家に持ち帰ってきた。

人形に詳しくない僕には、どんな材質で作られているのか分からなかったが、お湯で洗ってみると意外に奇麗になったのを覚えていた。でも、流石に着ていた服はどうしようもなかった。だから今、「彼女」が着ている服は、母さんの技術の結晶であるのだ。丁度その頃、母さんがどっかのフリマでまとめて買ってきた黒のワンピースが全然サイズが合わず、処分に困っていたところに僕がドロドロの服を着た人形を持ってきたものだから、母さんがその黒いワンピースを生地にして、アリスの服を仕立ててしまったのだ。何でも中

学高校と手芸部であった様で、そういった物を作るのは大の得意だったそうだ。

それ以来、アリスは僕の部屋の机にどっしりと腰をおろして座っていたというわけだ。「石の上にも三年」ならぬ「机の上にも一年」。おかげでうつすらと埃が積もっている。僕はアリスを手にとって立ち上がると、まじまじと彼女を見た。

今で言うフィギュアとは違った、頭が大きめに作られている彼女の眼はじっとこちらを見つめていた。突然、背筋に痺れにも似た寒さが走った。思わず後ろを振り向くが、そこには半開きになったドアしかない。僕はフツと息をつく。

何をビビってんだか。この前にあったホラー番組で「呪いの市松人形」が出ていたからかな。夜な夜な髪の毛が伸びるという内容だったが、人形が動く、喋るなんて今更小学生の怖い話にすらならない。

「洋介ーッ！！早く来ないとお母さんたち先食べちゃうわー！！」
下から母さんの声が再び聞こえてきた。やべっ！早く片付けないと！妹も僕と同じのが好きだから、アイツの事だからホントに食べるかもしれない。しかし部屋のゴミは少ないとはいえまだ時間がかかりそうだ。僕は手に持った人形、アリスをジッと見た。

もう荷物に入れていたと思っていたのだが、入れ忘れていたのは痛い。アパートに送る段ボール箱は既にガムテープでしっかりと閉めてあるから、入れるには再度、ガムテープを？さなきやならない。もう下に行かないと本当にピザ喰われそうだし。

少し考えた後、ようやく踏ん切りがついた。僕はアリスをゴミ袋へと入れた。

「もう人形って歳じゃねーしな。今までありがとな」

そう語りかけてみたが、ゴミ袋の中のアリスは答えてはくれない。紙切れに埋もれながら、唯唯プラスチックで出来ているだろう目で僕を見ていた。

しょうがない。後は夕食を食べてからまたやろう。そう決めた僕は部屋を出ようと半開きのドアに手を伸ばした。

体がピタッと止まる。部屋に突如響いた声に、心臓がドクンと高鳴った。

でも今、確かに部屋の中から聞こえた。

再び背中に寒気が走る。今度は先ほどよりも強く感じた。

ふいに背後に人の気配を覚えた。それはずる、ずると僕の方に近づいて来ているのが分かる。

一緒にいてええ

何度でも言おう。「今年は暑い」。

去年も一昨年も3年前も俺はこの家で言っているはずだ。別に涼しくなるための魔法の言葉でも気温が下がる呪文でもないが、こうやって着物を広げている俺の身にもなってほしい。いくら風通しの良い蔵だからといって、「土用干し」の準備をした後、何十もの着物を持って歩きまわる俺の身にもなってくれ。

別にここは南国のハワイでもなければ、エジプトでもないのだ。湿度がむんむんと上がっている日本の夏なのだ。外で数時間も動いていればそりゃ体中から水分が出てくる。

俺は赤色の着物を一着だけ衣紋掛けに掛けた後、一息置いたために蔵を後にした。

だめだ。これ以上動いたら脱水症状になる。夕方のニュースで「今日の午後、高校生の袴田雪駄君が脱水症状で倒れ、搬送先の病院で亡くなりました」と放送されるではないか。

俺一袴田雪駄は、今年から住み慣れた土地を離れ、S県にある三塚町の高校へと進学した。父の実家で祖母と二人暮らしをしているのだが、別に両親と仲が悪いわけではない。

確かに父の部屋から聞こえる歯ぎしりには殺意を覚えていたが、そんなの、祖母の口ずさむ変な寝言に比べたらどうってことない。親子の中は比較的良好であるし、あまりに貧乏で育てられないというわけでもない。そんなの、共働きでバリバリ働いてる両親に失礼だろ。

では何故都会を離れ、このような別の土地へと行きついたのか。そのことについては、俺の体力が余っている時に語ろうではないか。今は取り合えず水分補給を実行したいのだ。

びっしょりと汗を掻いたシャツを脱ぎながら庭を突っ切って縁側へと上がる。昔ながらの日本家屋とは不思議だ。別に冷房をつけて

いるわけでもないのに、一步敷居を跨げば、ひんやりとした空気が漂っている。外は日差しで燃えそうなほど暑いのに、関係わらずそうなのだ。いやはや、昔の人の知識と技術にはホント関心させられる。しかし今は古来の技術を懐かしむよりも、現代技術で作られたアイスを食べるのが先決だ。

俺は畳を踏みしめて部屋を一つ二つと横切り、冷蔵庫のある台所へと到着した。

家はシンと静まりかえっている。ちなみに祖母は今日、人に着物の手入れを任せて自分はコンサートに行ってしまった。なんでも、新しい少年ユニットの応援だとか。前までは店の事で行けなかったそうだが、俺が来てからというものの頻繁に店を空けるようになった。この前は大阪、今日は名古屋だそうだ。そんな時に店を任せられるのも既に慣れてきたものだ。

祖母ちゃん、もう会場に着いたかなと頭の中で思いながら、俺は冷蔵庫の取っ手に手をかける。とにかく冷たいものを腹に入れんといけない。こういう時のために買っておいだアイスが、いま正にその真価を示す時なのだ。

鼻歌を歌いながら冷蔵庫の冷凍室を開ける。

おや？段を間違えたかな？アイスがどこにもないぞ？

俺はもう一段下にある冷凍室を開けた。やはりない。氷と冷凍された肉に食パンはあれど、俺の好きな抹茶味のアイスがどこにも見当たらない。

「あれ・・・おかしいなあ」

「雪駄、君は何をブツブツと喋っているのだ？」

不意に後ろから声をかけられ、俺は顔に汗を滲ませて振り向いた。すると台所と居間をつないでいる敷居の丁度上に立ち、おかつぱ頭の和服少女がこちらを見ていた。いくら家の中が涼しいとはいえ、

汗一つ浮かばせることのない色白い顔が、人間離れした雰囲気醸し出す。俺より頭二つほど小さい体には、さっき俺が蔵で干したのと同じ赤い着物を身につけ、手には銀色に光るスプーンと、俺が探していたアイスのパックを持っている。

「『私』を最初に手入れしてくれるのはありがたいがね。そうやって裸になって家を歩くのはどうかと思うぞ」

「おいおいおいおい……単衣^{ひつえ}。お前、今日初めて見たと思ったらなに喰ってんだよ。お化けのくせに」

「お化けではない。キモノケだ。何度も言ってるではないか」

「そんなん知るか！キモノケだろうが足の毛だろうが人様のものを勝手に食べるな！そりゃ俺のアイスだぞッ！！」

そうだ。朝になっても見ないから忘れていたが、こいつもいるんだ。俺が威嚇するように声を出しても、「何を怒ってるのだから……」と言いたげな顔をしながら、こちらに近寄って来た。

「なんだ。君も食べたかったのか？まだ少し残っているが、良ければ君が食べるか？」

「残ってる……ってお前、蓋についているクリームは残っているとは言えねえよ。『付着してる』ってんだよ」

「ふむ」

「『『ふむ』じゃねーッ！……！」

俺の声が、台所に木霊した。

俺が祖母の家に来た理由。その一つがこいつ。おかっぱ頭の少女、単衣だ。

去年の夏に初めて遭遇した、長い年を掛けて魂を宿らした着物の少女。

彼女は「物の怪」とはまた異なった存在「キモノケ」なのだ。

十着目の着物を衣紋掛けに通した時、先ほど替えたばかりのシャツがペタツと体にひつつく感触を覚えた。汗を掻くというのは本来、体温を下げるための生理現象であるとテレビで見たことがあるが、今の俺にとっては不快指数を上げるための生理現象でしかない。

額にもジトリと汗が浮き出てくる。くっそ。消費税上げてもいいから代わりに湿度下げてくれ。

一応、今日の目標である着物は全て衣紋掛けにかけ終えた。着物を干すとき、直射日光はご法度だ。強い日光に当てると色が褪せたり、生地が傷んでしまう。だから着物を干す時は直射日光が当たらない、風通しの良い場所で干さなければならぬ。そのための作業として、ゴチャゴチャと散らかっていた蔵を片づけた後、蔵に浮遊していた埃を蔵から出し、広がった空間に着物を干した。先程台所から戻るときに何となしに付けてきた腕時計に目をやると、針は真上で止まっている。もう昼になったのか。

仕事を始めて早3時間が経過していた。どうやら干すことよりも蔵の片付けに時間を喰ったようだ。朝からの作業だったので相当しんどい思いをしたが、こうやって花柄の着物や鶴の絵が入った着物が蝶のようにその体を広げているのを見ると、苦労した甲斐もあったというもの。

そう思わなければやってられない。

今日干しているのは来週、隣町で開かれる花火大会に着ていく物だそうで、3つか4つの家族から予約が入っているそうだ。祖母からのメモには、そう書かれていた。

気分が急に沈んだ。別に他人の幸せが憎いというわけではない。実は俺もその花火大会に行く予定だったのだが、夏休みの始まりに

その計画は潰れてしまったのだ。一緒に行くはずの・・・まあ彼女にメールで振られてしまった。OH men：なんてこった。自分で言って悲しくなってきた。いやもう大丈夫だけどね？

チクショー急に顔から汗がすげえ出てきやがった。

汗と一緒に急に込み上げてきた欠伸を外に出したあと、俺は蔵の外へと出た。

日差しは正午になってさらに眩しさと暑さを増した。今日はこれから3〜4時間着物を干すから外には出ないが、この日差しだと用事がなくても外には出たくない。仮に今をときめくアイドルが水着姿でやって来て、「雪駄君！！一緒に外に行こう！！」と言われても遠慮するだろう。

やっぱりちよっと考えるかも。

なるべく光に当たらないよう、早足で庭を突っ切って家に入った。するとスイカを頬張りながら、単衣が出迎えてきた。視界の端に見える居間の畳には、白い皿に乗せたスイカが数切れある。俺が昼に食べようと思い、さっき切ったスイカだ。

「む、終わったのか雪駄。ご苦労だったな」

スイカを口の中でシャリシャリと鳴らしながら言われても全くいい気はしない。

「つーかよ単衣、お前の食べてるスイカ、俺のなんだけど」

「むう、そうだったか？じゃあ、残りは君に・・・」

「もう赤い部分がねえじゃん！それは残りじゃなくて「残りかす」だ！！」

こんの娘は・・・なぜに人に余りを渡そうとするのか。

俺は単衣が差し出したスイカの皮を無視し、畳に置かれた皿から

スイカを一切れ取った。

「ぬう！それは私が最後にとってもったのに！！」と後ろから声が聞こえるがそれも無視してスイカを齧った。

※※※※※

俺が地元の高校ではなく、こっちの方に来た理由も、こいつの正体を知りたいと思ったのが始まりだった。

キモノケ

彼女は我が祖母が蔵にしまってた「単衣」という着物が化けたもののなのだという。本人は聞くと怒ってくるが、着物の妖怪といえど分かりやすいかも知れない。

妖怪と聞くと、魂を奪ったり人の肉を食べるなど、そういったモノを想像する人もいるが、この娘はそんな大それたことはしない。代わりに、ヒトの喰い物はちょいちょいと奪っていく。先程、俺のアイスやスイカを食べていたのからでも分かるように、物を食べたり飲んだりもするし、俺などが触れることも出来る。

会話も普通に出来るし、じゃあ人間じゃねえかと思うかもしれないが、壁なんかは通り抜けてくるし、いつの間に消えたと思えば、急に背後に現れたりするなど、比喩的表現なしで、神出鬼没現れたり消えたりする。おかげで思春期真っ盛りな俺にはプライベートの「プ」の字もないわけだ。

それともう一つ。会話が出来ると言ったが、正確には「俺と祖母しかこいつと話せない」と言った方が正しい。かつてこいつが客のいる店頭に現れたのだが、その客は話題にするどころかコイツの方をチラリとも見ずに帰ってしまった。

単衣曰く、「私のようなものを見れるのは君のような者だけだ」

と言っていたが、まあ、簡単に言えばコイツを見れるのはそういったのを「ミエル人」だけらしい。

しかし去年から出会って一年経つが、未だに謎だらけの娘である。

「なんだ雪駄？さっきからこちらを見て・・・」

畳で向い合ってスイカを食べてると、ふいに単衣がぼそりと訪ねてきた。

どうやらさっきからコイツの事を見ていたらしい。自覚はなかったが、「なんでもねえよ」と一言呟くと、縁側の方に目をやる。日差しが地面が白く光っていた。

「そういえば雪駄、主はいつ帰ってくるのだ？朝早くから出掛けて行ったが、それほど大事な用なのか？」

「祖母ちゃんはコンサート・・・って言っても分からねえかな。まあ、歌聞きに行ったんだよ。帰ってくるのは大分遅いぜ」

スイカの種を口から出しながら答えると、急に単衣が慌てだした。

「むうッ！では今日の夕餉はどうするのだ！？私としては唐揚げが食べたかったのに！！」

知るか。

「夕飯は後でコンビニで弁当買ってくる。つーかお前ホントお化けの癖によく喰うな」

「お化けではない。キモノケだ」

「へいへい」

このやり取りも何度目なのか。

手に持っていたスイカも食べる部分が無くなったところで俺は立ち上がった。

「俺は宿題するから部屋に一旦戻るわ。喰ったスイカ片付けとけよ」

「冷蔵庫にある羊羹、食べてもいいか？」

「ああ、喰っててもいいから部屋に侵入してくるなよ。今日の分は今のうちに終わらしたいからよ」

スイカの皮を台所へと持っていき、『生ゴミ』と書かれたプラスチック製のごみ箱を開けた。鼻に来る臭いに、自然と顔がゆがむ。ほおり投げるようにスイカの皮を投げると、俺は奥にある自分の部屋へと行くため、再び居間を通り縁側を歩いた。居間を通過するとき、単衣が既に羊羹をもちやもちゃ食べていたのを見たが、何も言わずに通過した。物を食べてる時は大人しい奴だから、今のうちに今日の宿題である英語は終わらしておきたい。

夕方には部活の「課題」があんだから。

※※※※※

英語の宿題は思ったよりも良好はかどった。

Did you hear that Jack married Ann?

Oh, really? It () great!!

プリントに書かれた英文を読み、空欄に当てはまる単語を入れなさいという問題を今やっているが、さほど難しくもなく、分らない個所は電子辞書で調べながら埋めていくと、思った以上にスラ斯拉といった。

あれだけ空欄の多かったプリントも、残すところ3つくらいのカッコだけになっており、あと数分で俺は英語の呪縛から解かれる。そう思うと自然と気持ちが軽くなった。

他の教科はからっきしな俺だが英語だけは何故だか強い。中学の時になぜか必死で取った英検準二級は無駄ではなかったようだ。そう思っていると、後ろから誰かに見られるような視線に気づく。俺は無視してシャーペンをプリントに走らせた。どうせ正体はバレバレだ。振り返らずに俺は尋ねた。

「単衣、入ってくるなっていっただろ」

少しの沈黙の後、後ろで閉じた障子を挟んで声が返って来た。

「別に、君の部屋に入っていないではないか」

「関係ねえよ。後ろに入られると気になるんだよ」

障子がスツと開く音と同時に部屋に入ってくる足音が聞こえてきた。顔を上げて後ろを見ると、単衣がつまらなさそうに立ってこちらを見ている。

唇に小豆の残りがひつついている。さっきまで羊羹食べていたのかと思っていると、単衣が俺の横に来てドサツと座った。

「・・・なんで部屋に入ってくるんだよ」

「後ろにいられるのは嫌なんだろう？だから横に来てやったんだ。感謝したまえ」

なんだそのとんちは。

「へいへい。ありがとさん。口にあんこ付いてるじゃねえか。だらしねえ奴だな」

近くにあったティッシュ箱を寄せて何枚か取ると、単衣の口の周りを拭く。いつもはジジ臭いこと言う癖に、こういうところはなんとか年相応だ。いや、最近の小学生も口についたあんこぐらい自分で取るよな？

「むう・・・だらしくない。主も言っていたではないか。君はもっと年上を敬うべきだ」

「口にあんこ付けた年上は敬えとは祖母ちゃんは言ってるよ」

あんこを拭きとったティッシュをゴミ箱に捨てると、プリントの最後の空欄に、単語を書き込んだ。これで今日の分の宿題は終わった。俺はあゝと唸りながら背筋を伸ばした。

伸ばしていると腹筋がツルような感覚に襲われ、慌てて伸びを止める。ちよつと腹が痛い。

「んで、どうしたんだ単衣？」

「やはり忘れていたな。着物を干してから大分時間が経っているぞ？そろそろ取り込むべきだ」

ペシペシと頭を叩いてくる単衣に俺はあつとなり時計を見る。壁にかけられているレトロな時計の針は3時を過ぎた場所を指している。「やべっ!」と口の中で呟き、慌てて蔵の方へと向かった。

着物を干す時間は、おおよそ3〜4時間だといわれる。それはそれ以上干すと型崩れやシワの原因になり、虫が付いてしまう事もある。今日くらいの暑い日なんかは2時間くらいで良かったわけだが、宿題に頭が移ってしまいすっかり忘れていた。蔵の方へ急いでいくと、着物は風に揺られながら、干した時と変わらない姿で腕を広げていた。

俺は一着ずつチェックしながら衣紋掛けから着物を外していった。幸い、虫につかれたものなければ型崩れも起こっていない。ほっと息を吐くと、カタンと乾いた音が蔵に響いた。音のした方を見ると、いつの間に入って来たのか筆筥の上に腰かけた単衣が呆れた表情をしている。

「私が教えたから良かったものを．．．危うく『私』もえらい事になったではないか!」

どうやらこの妖怪、自分の着物が型崩れすることに不満があるらしい。だったら自分でやれよと言いたいところだが、蔵の中にある新しいたとう紙で着物を包むと、近くの机にそれを置いた。

「わーったよ単衣。私が悪うございました!教えてくれてありがとうね!」

「ふん、分かればいいのだ」

単衣は自信満々に言うと、俺に向かって胸を張ってみせる。くっそ何処でそんなコトを覚えてくるんだか。そういや最近こいつTV良く見てたな。TV番組は子供だけではなくて妖怪にも影響をもた

らすのか？

「妖怪ではない。キモノケだ」

ヒトの心を読んでいたかのようにぼそりと呟く単衣を一睨みし、単衣の着物も「たとう紙」に包み終える。これで今日の仕事は全て終了した。蔵に来たのが三時十五分だったから、今は大体四十五分くらいだろうか。たとう紙で包んだ着物を2，3着重ねると、俺は蔵を出た。

「単衣」

「んむ、なんだ？」

後ろをパタパタと着いてくる単衣は今にも眠りそうなくらいぼやけた声で聞き返してきた。

「お前今日の夕飯唐揚げが良いって言ってたろ？これ終わったらコンビニ行くけどお前も来るか？」

「む．．．いいのか？」

「そう言うけどいつも着いて来てるけどな．．．今日俺、夜に出かけるからよ。夕飯は弁当食べててな」

縁側を歩いて祖母の部屋に到着すると、足で襖を開けて中に入る。きつちりと片付いた机や筆筒を見ると流石祖母ちゃんだと感心しそうになるが、障子を挟んだ奥の寝室には、アイドルのポスターや団扇があることは既に承知だ。

机の上に着物を置き、残りの着物を持ってくるため早足で蔵に戻

って行く。

今日は夜中に課題があるのだから急ごう。俺は庭で足を止め、瓦屋根も見える空を見上げた。

高校に入って入部したオカルト研究会の課題。

雲ひとつないこの日は、心霊スポットの調査するにはもってこいの日だった。

(三)

「ありがとうございました」

後ろからやってきた50代くらいの男の店員の声と一緒に、俺と単衣はコンビニから出た。右手には今日の夕飯である唐揚げの入った弁当とサンドイッチが二つばかりが入ったビニール袋をぶら下げながら、蟬の鳴き声に包まれた道を横一列になって歩いた。

車道側を歩く単衣の両手には先程まで袋に入れていたアイスがぶら下がっており、「どちらがいい？」と聞いてきたので、右手に持ったあずきのアイスを指名したら、「これは私が食べるから君はこれにするんだ」と、左に持ったサイダーのアイスの袋を開けると、俺に手渡してきた。

いや、だったら選ばせんよこいつ・・・

俺は黙って単衣からアイスを受け取って齧った。サイダー特有の甘さと、中に入っている細かい氷の冷たさが口に広がる。夜に近づいているというのに、未だ衰えることのない暑さも少しは紛れそう。

「うむ、やはりアイスは良いものだ」

隣で汗ひとつ掻いていない単衣があずきアイスを齧りながらそう言ってくるのを見ると、なぜか憎らしい気持が沸々と沸き上がってくる。つーかお前昼に俺のアイス喰ってたろ？どんだけ喰うんだよ。込み上げてくるなにかを飲み込むかのように、俺は手に持ったアイスを歯で削っていく。熱が溜まって来た背中に文字通り「熱さ」を感じながら、足の回転を少し早めた。

「ところで君は今日の夜、どこにいくのだ？」

通り過ぎた電柱を区切りにしたかのように、単衣が急に行き先を聞いてきた。声と共に「シャリシャリ」とアイスを齧る音も聞こえてくる。家でもそうだが、一応女の子なんだから食べながら話すなよ。大声で言いたいのだが、こんな道中で「独り言」を言う気にはならない。道路の向かい側からスーツを着た中年のサラリーマンが後ろに通り過ぎて行った。人がいないことを確認した後、俺は小声で答えた。

「・・・しもつか下塚にだよ」

「下塚？」

アイスを齧りながら単衣は聞き返してきた。先程まであったあずきアイスは、すでに4分の3は姿を消している。

「あの山と畑ばかりのところにか？君も変わった奴だな。虫取りにでもいくのか？」

あまりに違う目的に、単衣の方を向いて思わず声を出す。

「なんでこの歳で虫取りにいかなきゃならねえんだよ？俺は・・・」

言葉が続けようとした俺の視界に、4、5人で歩いてくる女の子たちが入ってきて、慌てて言葉を止めた。さっきから単衣と普通に会話しているが、キモノケである単衣は大抵の人には「見えない」。

そのため先程までの会話は、俺からは当たり前のように見えていても、道行く人には「誰もいない場所を見ながら一人喋っている変な人」に見えるわけだ。去年の夏はまだそれが分からず、外で大声で喋っていたところをおばさん方にぬるい目で見られたのは記憶に新しい。それで単衣と外を出歩く際は、極力喋らないようにしてい

るのだが。

女の子たちは部活の帰りなのか、全員同じ色の短パンと、胸のあたりに何か英語で書かれたシャツを着て、楽しそうに喋っている。背の高さを見ても分らないが、顔を見る限りは高校生じゃない。たぶん、近くの中学生だろうか。

そんなことを考えていると女子中学生たちが俺の横を通り過ぎていく。俺もあまり見ないよう見ないよう、心を無心にしながら彼女たちの横を抜けていった。

その時、女子中学生の一人が単衣の肩にぶつかった。

「・・・・・・・・？」

俺に触られたと思ったのか、女の子が通り過ぎていく俺の方に顔を向けたのが僅かに見えた。もちろん俺がぶつかったわけではない。ぶつかったのは隣でアイスを食べ終えたこのおかつぱ少女である。

しかし単衣は涼しい顔で、あずきアイスの棒を口に入れてコロコロと動かしているだけ。

偶にこういう事はあるが、これを見ると、改めてこいつが本当に「見えていない」と「人間じゃない」と思わされる。中学生の集団と距離が離れた所で、単衣がアイスの棒を口から出すと、俺の方に顔を近づけた。

「で・・・なんであんな辺鄙なところにいくのだ？」

こいつなりの配慮なのか、先ほどよりもずっと小さい声で聞いてきた。話そうとしたが止めた。もう家も近い。

「・・・・・・・・家だな」

ポツリとつぶやいた時、横にしていたアイスの下半分が地面に落ち

た。

下塚とは三塚町の北側にある地区の事で、昔から田んぼや畑が多い場所だ。

この町は大きく分けて三つの地区に分かれており、北側の下塚、南側の^{かみつか}上塚、そしてその真ん中に^{なかつか}中塚がある。ちなみに、我が家のある場所は中塚だ。

小さい頃から何度も祖母が話してくれるのですっかり覚えてしまったが、かつて三塚町はそれぞれ上塚、中塚、下塚と分かれていたらしい。

江戸中期から貿易で栄えていた上塚とは違い、下塚は山や森などに囲まれた場所であり、その町の人はもっぱら農業に精をだしていたそう。しかし高度経済成長期の頃、下塚では土地開発が行われ始めた。山や森の中にホテルや健康ランドが建ち、田んぼのど真ん中に集合住宅や一件屋が現れた。人口も一時期グッと上がったというが、バブル崩壊と共に下塚町はそのあおりを一気に受けた。

次々と建物は閉められ、町自体が経営危機寸前まで追い詰められた。もちろんそれは上塚や中塚も例外ではなく、下塚程ではないがかなりダメージを受けたらしい。そのことが発端かどうかは分からないが、その後上塚と中塚、そして下塚の三つの町が合併するという案が生まれ、今の三塚町になったということだ。

まあ、合併しても事態が改善するわけでもなく、合併から十数年経った今でも、下塚の畑や森には、当時の住宅や建物が寂しく残っているわけだ。十数年経った無人の家、大人心には時代の名残とし

て心を痛めるのだが、子供心には冒険心を燃やす格好の舞台である。

「お化け屋敷？」

居間の柱に体を預け、単衣は確認するように言った。俺は台所に単衣の分の弁当を置くと、サンドイッチを持って居間へと戻った。

「そ、俺の入っている部活・・・部活ってわけでもないけど、オカルト研究会でに入ってたな。夏休みの宿題で『心霊スポットを何か所探索せよ!』ってというのがあんの」

単衣の頭上にあった時計に目をやると、針の位置は5時を少し過ぎた場所を指していた。

オカルト研究会、通称オカ研とは俺が通う高校にある同好会の一つ。人数は俺を入れて3、4人しかいないから部活としてではなく同好会扱いとなっている。入学した頃、部活のオリエンテーションでその会の部長に強引に部屋に連れ込まれ、あれよあれよという間に入部が決定してしまったわけだ。別に「ノー」と言えないわけじゃないよ？入りたい部活も特になかったし、単衣の事も調べたかったこともあったので、入ったのだ。まあ、早い時期に部活を辞めていく同級生を見ながら尚、こうして活発に活動に参加しているのだから、ある意味健全。

単衣と向かい同士になって座り、畳に置いていたケータイと祖母から貸してもらったデジカメの電池残量を確認する。ケータイは電池量が少し無くなってたが、家に帰るまでは十分持つだろう。デジカメの方は満タンド。なにもないとは思うのだが、「調査書」を書く際にその場所に行ってきたという証拠も出さなければならぬ。うちのオカ研はそんな所は妙に細かい。

後は懐中電灯であるが、玄関にあるモノを持っていけばいい。これで準備は完了だ。

家を出るのはもう少し後。時間つぶしにとTVのリモコンを手に取り、電源のボタンを押そうとした時、単衣がぽつりと呟いた。

「不思議だな君は」

小さく聞こえてきたのに嫌なほどはっきりと脳を響かせた声は、リモコンの操作をビシッと止めさせた。

「なにがだ？お化け屋敷に行くのがか？」

俺が単衣に尋ねると、すぐに返答してきた。

「君だけじゃないかも知れないがね。人間というものはわざわざ危険な場所へと行こうというのだから、私にとってはほどほど理解できない」

「危険な場所って・・・そんな大げさなところでもないだろうよ。いくらお化けが出るからって・・・行ったら死ぬわけじゃねえんだし」

リモコン操作を再開すると、「あ、雪駄。ここで止めてくれ」と横からリクエストが入ったのでリモコン操作を停止して畳に置く。画面には犬やペンギンの着ぐるみと3歳4歳程のお子様たちが踊っている姿が映し出されていた。そうそう、俺も小さい頃は画面の前で踊ってた・・・なんで16の高校生が夏休みに子供番組？

「雪駄。君はもう少し注意を払うべきだ」

「注意？」

「君がこの家に来て幾らか経つが、思った以上に君は力を持っている」

「力？」

「君たちで言う・・・霊、まあ分かり易く言えば私のような存在を見る力だ」

黙って単衣の言う事を聞いているが、正直良く分からない。そりゃ、単衣が見えたり触れたりするってことは、俺にもいわゆる「靈感」というものはあるのだろう。だけどそれがなんで「危険」だとか「注意」するだとかに繋がる？

単衣はTVに顔を向けたまま続ける。

「大抵の人間は私のような存在は見えないし気づきもしない。今日、道で女子と私がぶつかっただろ？それでもあちらには私の存在は分かっていたいなかった。それが当たり前なのだ。人間の君と人間ではない私とでは住む世界が違うのだから」

「どこぞのセレブかお前は」

ふざけ半分で返したら後頭部に強い衝撃が襲ってきた。

「年上の話は真面目に聞けと教わらなかったのか。全く」

どうやら単衣が身を乗り出して頭を叩いてきたらしい。頭に受けた衝撃は眼球もグラグラと揺らした。とても年下に見える少女が繰り出した攻撃とは思えない。

「君の言うお化け屋敷に、私のようなのがいるかどうかは分からない

い。だがもし、いるのだとしたら、君には見えるだろうし気配も感じるだろうさ」

「触れたりも出来る？」

「それが危険なのだ。君ら人間が一人一人違うように、私たちも一人一人違うんだ。君を見て逃げる者もいるし、話しかけてくるものもいれば・・・」

単衣はそこまで言うと言話を区切った。そして一息吸った後、

「殺しにくるものもいる」

「はいっ!？」

「言っただろう？一人一人が違うんだ。君達の中にも殺人を犯す者がいるように、私たちにも『ソレ』はいる」

余りの過激な発言に「この娘何言っちゃってるの？」と思ってしまったが、単衣の目を見て、それは本当なのだと直感的に感じた。

ふと、今日行く場所の噂を頭で思い返す。ますます単衣の言葉に真実味が増してきた。

TVから番組のED曲が流れてくる。子供の寂しそうな歌声がゆっくりと耳に入ってきて、背筋をぞわぞわと震えさせた。こんな時になんちゅう悲しい歌を・・・あれか、よってたかって俺をビビらしたいのか。

「だから君は気をつけなければならんだ。私たちが見える君もまた、私たちに見られているのだから」

単衣がそう言って口を閉じた瞬間、悲しい曲を流していた番組が丁度終了して、次の番組へと移った。

時計を見ると出発予定時刻となっている。俺は腹にグツと力を込めると、置いてあるサンドイッチを持って立ち上がった。諦めるのかと思っていたのか、単衣は少し驚いたようにこちらを見ている。

「・・・行くのかい？君の事だ。あれだけ言ったら『今日はやめようかな』とでも言うと思ったたんだがね」

やはりそう思っていたか性悪妖怪め。だがうぬの思い通りに事は運ばせぬ。

「俺がお前の脅しにビビるとでも？甘いねえ単衣ちゃん。ここでやめたらオカルト研究会会員及び都会っ子である袴田雪駄の名が廃るってもんよ」

「先日、油虫に大声上げてビビっていた雪駄君の名は既に廃っているだろう」

「・・・あれはノーカン」

流星に飛んでくる「G」には対抗出来ないさ。

いつものサンダルではなくスポーツ用の靴を履くと、靴棚の上に置いてある懐中電灯を持って玄関のドアを開けた。

店の反対側という事もあり、目の前には車は通れない狭い道が、通りにつながるために横に伸びている。地面はあれだけ太陽の光で白くなっていたにも関わらず、今では影の黒さが目立ってきている。いよいよ暗くなり始めてきた。

ドアの近くに停めてあったママチャリのカゴにサンドイッチと懐中電灯を入れると、自転車を道路に動かしてさっと跨った。ここで

パンクしてたらさすがに中止だが、チェーンが少し錆びてるだけで、パンクしてはいないようだ。自転車の鍵を廻してロックを外すと、目的地へとペダルに体重をかけた。

「雪駄、ちょっと待ってくれ」

数センチ動いた後に横を向くと、いつの間に外に出て来たのか単衣が玄関に立っていた。

見送りとは意外だ。

「帰ってくる時、あんまん買ってきてほしい。つぶあんとしあんの二つ」

「どんだけ喰うんだお前は！」

唯の注文かい。というかこいつは羊羹といいあずきアイスといいどれだけ小豆喰うんだよ。小豆洗いでもそんなに愛着ないわ。

「小豆洗いではない。キモノケだ」

居間でのシリアス(?)な雰囲気は何処にいったのだろうか。「弁当食べて待ってろ」とだけ言うと、今度こそ目的地へ自転車を動かした。

(四)

小さな用水路の上に跨った橋を横切った頃、あれだけ明るかった空は黒く淀み、自転車のライトがはつきりとコンクリートの道路を照らし始めた。

腕時計に目をやる。時計の針は既に八時になろうとしていた。予定ではもうお目当ての家についてる筈なのだが、どうやら自宅を出てからゆつくりと進み過ぎたようだ。さっきまでだらだらと回していたサドルに力を入れ、自転車の速度を上げた。

風が少し生ぬるく感じる。背中の方にじわっと汗が浮かび流れるのをイメージすると、何故だか水を含ませたスポンジを連想してしまった。俺は1個百円のスポンジかい。

・・・少し涼しくなった気がする。

辺りが本格的に暗くなってくるにつれ、周りの風景はガチャガチャあった家を少しずつ消していった。

アパートや小じゃれた一軒家は木造平屋かボロボロの物置き場へと姿を変え、偶に漂ってきた夕飯の匂いは土の匂いに交代した。時々ま香る、ワケの分からない草の匂いには、たまらず顔を覆う。

その後にはすぐ、あれだけあった人の気配と空気も無くなった。偶に車かバスが通り過ぎるが、それだけ。夜の下塚に入ったんだなと思い知らされる。

下塚の中枢を走る細いアスファルト道路を進みながら、汗が出てきた額を拭って顔を左右に振った。

下塚は中塚、上塚と比べると高い場所にあり、顔を振るとどちらにも田んぼ、若しくは畑か果樹園が広がる訳だが、左を見れば中塚や上塚の家や店からの光が蛍のように地面を照らしている。しかし右を向けば、いつもは緑に染まった山が黒い厚紙のような風貌でそびえ、その手前をざわめく音も消した森が、ジッとこちらを睨んでいるように立っているのだ。

ふと、森の中へと続く道路を発見した。アチコチが破損し、とても車が通れそうもない。ぽっかりと空いた森の中に伸びている道路は、まるで誰かが来るのを待っているかのように思えた。

―私たちが見える君は、逆に見られているのだから

心臓がちよっと痛い。多分、原因はここまで自転車を漕いできたからではないのだろう。俺はなるべく森の方を見ないように、顔を左斜めに向けて自転車を走らせていった。

くそ。単衣にあんなこと言われた所為か、段々不安になってきたぞ。

「あゝっ、どうしよう・・・行きたく無くなって来たな」

単衣と遭ってからすっかり麻痺していたが、俺は元々怖がりなタイプなんだ。

お化けが見えているのに怖がり？ちよっと待て。別に怖がりだからっていろいろあるだろ。乗り物酔いでも、船には酔うけど飛行機では酔わない人がいるようにだ。俺は単衣という存在のおかげでお化けの類は克服したが、未だにレンタルショップではホラー系のDVDには躊躇するし、お化け屋敷なんかはOUTだ。

要はダイレクトにビビらされるのが駄目だという事なのだ。

それが今関係あるのかと？知るか。

誰に言うでもない独り言を頭で喋りながら自転車を漕ぎ続け、とうとう視界に錆びれた家を1件、2件と確認出来るようになった。

「そろそろ横に、と・・・」

目的の場所まであと少し。家を出る時と比べると、低くなったテンションと高くなった恐怖心をぐっと飲み込み、細い道路の横に伸

びるさらに細い道路へと曲がった。先にはどんよりと睨む森。そしてその傍にポツンと立っている民家が小さく見える。

俺の目的地、かつて実際に殺人事件があった、呪いの人形があるという家だ。

※※※※

呪いの人形。

インターネットで検索すれば何十体も出てくるであろう「コレ」は、ご丁寧にも三塚町にもあるという。変わっているとすれば、髪が勝手に伸びるような日本人形ではなく、見つかると殺されるという西洋風の人形だそうだ。

噂の発端となった事件は、10数年前に起きたと言われている。俺が小学校に上がる前にあったというのだが、当時は夏休みくらいにしか来ていなかった俺には全く覚えがない。当たり前といえばそうなのだが。

とある日の夜、大学生となる家の長男が、妹と母をメッタ刺しにした。警察が家に入ったのはその翌朝、家の中は凄まじい状態であったらしい。一階の居間には長男の妹と母が座ったままの状態で血を流し、テーブルの上には昨夜の夕食だったのか、赤く染まったピザが置かれていたという。

そして二階には犯人と思われる家の長男は、自らの首に包丁を突き刺したまま椅子に座っていた。当然長男は絶命。その目の前には、血を浴びた人形が座っていた。それが噂の、「呪いの人形」である。当時、仕事の事情で帰っていなかった父親は助かったというわけなのだが、当然家族が死んだ家に住めるはずもなく、家は売られた。

その父親が今何をしているのかは不明だ。

さて、ここから話は奇妙な方向へと流れていく。事件の後、この家にはいろいろな噂が出てきた。

誰もいない家の中から話声が聞こえた。

窓から明かりが浮かんでいた。

二階の窓から誰かが外を覗いていた。

ピザを持って家に入ると、誰かが近づいてくる音が聞こえてくる。

こんな事件が起きたのだから、当然湧いて出てくる、ある意味では自然現象ともいえる噂だろう。そんな誰が体験したのか分からないような噂だけなら、これからその家に入る俺もどれだけ気が楽か。呪いの人形の噂が立ったのは事件から数年後の事。肝試しに県外からやって来た数名のグループが、この家に入った際に二階に転がっていた人形を見つけた。それがあの、長男の机に置かれていた白い髪の人形だった。そいつらが何を考えていたのかは知るはずもないが、肝試しの思い出にという事なのだろうか、その人形を持ち帰ったそうだ。

人形を持って帰った若者達はその後、次々と事故死や不自然な死を遂げることになる。そして最後の一人となった男は、この家で発見される。

かつて長男のいた部屋の椅子に座り、首に包丁を刺した状態で。

血に濡れた床には、彼らが持って行った人形が転がっていた。

以来、この家に入ってその人形を見つけて、家から持ち出した者は不幸な死に見舞われるといわれている。

「呪いの人形ね」

俺はその人形があるという家から20メートルほど離れた場所で

自転車を降りると、道路脇の少し開けた場所へ自転車を停めた。「本物」がいるにせよそうでないにせよ、何がいるのか分からない家の近くに自転車を置くのは気分的にい嫌だった。

自転車を停めた場所には今風の黒色の乗用車がひっそりと止めてあり、興味本位で覗いてみたが当然の如く、中には誰もいなかった。仮にいたら、かなり気まずいことにはなるが、ここに止めてあるという事は「先客」が来ているんだろうか。

籠の中に入れて来た懐中電灯をポケットに突っ込むと、家から持ってきたサンドイッチの包み紙を破り、卵サンドを一切れ齧った。

口の中に卵サンドの甘さが広がってきた。ここまで何も食わずに来た所為か、さっきから腹がクウクウと痛かった。最近は成長期の所為か、中学の頃よりも明らかに食事量が増えた。今ある卵サンドとツナサンドを食べても多分物足りないと思う。

頭の隅にふと、玄関前に出てきた単衣の姿が浮かんできた。

―帰ってくる時、あんまり買ってきてほしい。つぶあんとしあんの二つ

・・・ぬう、あんまり買って行きたくはないが・・・しょうがないか。帰りにどっかコンビニでも寄っていくか。

あつという間になくなった卵サンドの包み紙を丸めてカゴに入れると、俺の手は自然にツナサンドにかかった。齧りながら片方の手をポケットに伸ばし、懐中電灯を持つとスイッチを点けた。赤と橙を混じらせたような光が地面を照らした。

懐中電灯をゆっくりと持ち上げ、周りを囲んでいるブロック塀、家の外壁、そして俺の方から見えている窓と、懐中電灯の明かりで照らしながら、家の外観を観察していく。

ブロック塀には、なんの植物だか分からない蔓が所々を覆い、蔓のない場所にはスプレーで落書きが書かれている。「オレ参上!!」

だとか「○○死ね！」等と、赤や黄のスプレー塗料が書き手の心を実によく表してる。

外壁は昔の家によく見られるモルタル式であつたと思われるが、長い年月の所為か、それとも誰かの手がそうさせたのか、壁の表面は三分の一ぐらい剥がれていて、家を構築しているだろう骨組みが見えている。残っている部分には、ホントに誰が書いたのか、英語で落書きされていた。

電車の窓から見えたりするが、ああいうのはホント、誰が書いてるんだろうか？

屋根には黒い瓦が乗っかっていて、なぜか、見えない向こう側には誰がか潜んでそうな気になった。

窓があつたと思われる穴に明かりを伸ばす。

懐中電灯の光は微かに家の中に届いたが、距離があるおかげで光が当たってる所さえも良く見えない。中を見たけりゃ入ってこいということだ。

ツナサンドもあつという間に手から消え失せた。一度大きく深呼吸する。よし、腹にモノ入れたおかげか気持ちちは固まった。

「君の事だ。あれだけ言ったら『今日はやめようかな』とでも言うと思ったたんだがね

「ざけんな。こっちは四六時中、お前と一緒に生活してんだ。いまさら呪いの人形の一体や二体、どうってことねえよ」

ペツと地面に唾を吐く。先程よりもぐっと気温が下がった気がした。俺はもう一度深呼吸をすると、家の方へと一歩足を踏み出した。

※※※※

家の入口には、「立ち入り禁止」と書かれた黄色のテープがクシヤクシヤになって地面に落ち、うっすらと砂と砂利を被っていた。玄関口の扉にも、黄色いテープが張ってあるが、大部分は下に落ちている。

流石に真正面から見ると、いかにも出そうな雰囲気が出てる。

「……よし。行くぞ」

今更だが俺は一人で来た事を悔やみ、石畳の廊下を歩いて扉に近づいて扉のノブに手を掛けた。しかし、ガキッと錆びた音がしただけで扉は全く動かない。

「はぁ？何だよ、鍵閉まってんのか？」

あるいは鍵の部分が錆びて、扉とひっついてしまったのか。力を入れて引っ張ってみるがピクリとも動かない。

さて、どうしたものか……。俺は懐中電灯を回して、辺りを照らしてみる。

扉の下を見てみると、木の葉が何枚か挟まってる。隅にはせともので作られた、兎の人形が、顔を半分にしてこちらを見てる。ウワッ、見なきゃ良かった。

ポケットに入っていたデジカメを取り出して、入口の扉にレンズを向けた。シャッターを押す。電子音の後に出了たフラッシュが一瞬目の前を白くした。撮った画像は確認せずに、電源を切ると再びポケットに入れた。

「どうっすかな……」

夏休みの課題がのっけから暗礁に乗り上げたワケだが、流石にこれでは帰れない。こんな入り口だけの写真で調査書なんか書いたら、部長になにをされることやら・・・

扉から離れて横の方に懐中電灯を向ける。入れない場所が心霊スポットで噂されるはずがない。正面から入れないことは、どこか別の場所から中にはいれるということだ。

右側の方に懐中電灯を向けるがかつての住人の趣味なのか、おびただしい数のプランターから伸びる草花が群生している。ブロック塀を覆っている蔓の正体はこれかもしれない。

諦めて反対側に向くと、ブロック塀と壁の間に人が十分に通れるスペースを見つけた。砂利と土、そしてガラス片等で黒ずんでいる地面だが、塀の突き辺りの方まで道が開けているのを見ると、どうやらこの先が本当の入口のようだ。

喉が渴いてきた。俺はゴクリと唾を飲んだ。

足を石畳から外してブロック塀と家の壁との間を進んでいき、突き辺りを曲がると目の先に、子供が遊べるくらいの小さな空間を見つけた。

ビンゴ。俺は気分よく先に進んでいく。

開けた場所に来て息を呑んだ。横手の方に和室のような部屋があるが、ガラス戸がグシャグシャになって地面に落ちている。網戸も破られて無残に室内に散らばっていて、まるで強盗が来たんではないかという有様だ。

俺と同じ様に、正面から入ることが出来ずにこちらから入ろうとした奴の仕業だろうか。こちらとしては楽に入れるからそうそう悪くも言えないが、もう少し丁寧に入れないものなのか。

地面に散乱したガラス戸の枠とガラス片に気をつけて、部屋の傍へと近づいていった。

床に微かに見えた畳の目から、ここが和室だと確信出来た。懐中電灯を点けなくても、そこら中いろいろと物が散乱しているのが分

かる。

明かりを部屋の中に向けると、木の破片や雑誌等、いろいろな床に飛び散っていた。別の部屋に繋がっているのか、それとも廊下に繋がっているのかは知らないが、散乱した畳の向こう側にはボロボロの襖が見える。

ここでも人殺されてるんじゃないか？そう思えるくらいに荒らされた部屋の中を少し見渡した後、ガラクタを踏まないよう注意して足を踏み入れた時だった。

「あ、やべっ」

思わず声が出た。じつとりと重くなった空気が体中に纏わりついてくる。サラサラと体から出てきた汗は、明らかに暑さからくるのではない。

―君の言うお化け屋敷に私みたいなのがいるかどうかは分からない。だがもし、いるのだとしたら、君には見えるだろうし気配も感じるだろうさ

単衣の言っていたことが再び頭に浮かんできた。あの言葉の意味は正直良く分かっていなかったが、なるほど、今は体で実感できる。「何か」がこの家にいる。

(五) (前書き)

(五)

世の中には‘セーフ’と‘アウト’を分ける、いわば線のようなものが、アチコチで引かれている。

もちろん、道路でよく見かけるようなヘルメットかぶったおっさんが頭を下げて、「危険、この先行き止まり！」と書いてある看板とかのことではない。‘自分の中’での危険線の事だ。

「これはヤバイ」とか、「これ以上はまずい」といったようないわゆる心のブレーキのことを俺は言っていました、同じ状況下でも人によって「危険だ!!」と思うラインというのはマチマチだと思う。そして‘何処で’その線引きをするかという基準も。

現在、無意識ながらも俺はその線を跨ぎ、アウトゾーンへと踏み入ってしまった。いろいろな物が散乱して、生活している空気は消え去った廃屋の和室。そこにはねっとりとしたプレッシャーがうねうねと留まっており、俺の体に纏わりつき始めていた。

(うっ・・・)

腹に違和感を覚える。サラサラと流れてくる汗は夏場だというのに不快な冷たさを感じさせた。部屋に入ってまだ数メートル、も入っていない俺の体は危険信号を鳴らしまくっていた。

―君には見えるだろうし気配も感じるだろうさ

(『感じる』ってこういう事かよッ！)

単衣が言っていたことが頭の中をよぎり齒をギリッと鳴らす。
映画の武士や凄腕のヒットマンとか名探偵とかが頭にピーンッと

音を出して閃くような感覚とは程遠い。幽霊の気配を感じるのがこんなにも「重い」ものだとは思わなかった。

そう考えている間にも、俺の体にはねとつくようなプレッシャーが襲ってきた。今頃であるが単衣の話にビビっていた方が良かったと頭の片隅で思った。もしもこれが単衣の言っていたように、

「逃げる者もいるし話しかけてくるのもいれば殺しにくるのもいる」

だとすれば、もしそう言うのがいるのなら絶対に逃げるだとか話すとかそんな平和主義じゃないのは確かだ。

(帰ろう・・・これ以上いると不味いなこりゃ・・・)

恐怖、というよりも危険を感じた俺はすぐさま、**撤退**を決定した。

体も頭も自分が危険だと警報を鳴らしているのは良く認識出来た。ここは俺が入ってはいけない場所。入るのなら有名な霊能力者や素人さんがいい。どうやら俺みたいなどっちつかずには居心地のいい場所ではない。

部屋を出ようと決心し、最後に部屋の中を見回した。そして顔を視線の先に立つ襖に向けたまま下がろうと行動に移す。本当はすぐにでも逃げたいのだが、この部屋に背を向けるのには抵抗があった。体の重心を後ろに移してそのまま足を後ろに下げようと足を床から離す。しかし、

(・・・・・・は?)

俺の足は元の場所から一步、「前進」していた。

確かに後ろに行こうとした。今でも逃げたい気持ちでいっぱいなのだ。なのになぜ・・・

ズリッ

そう思っている時、足がもう一歩前に出た。

「お、おいちょ・・・」

ちょっと待て。そんなこと言っても何も意味がないのは分かっていたのだが、無意識に口から零れる。だけどそんな俺の抗議も無視するかの如く足はまた一歩前へと踏み出た。

「くそッ！！という事だよチクショ！」

俺は必死で体を後ろへと抗うが、どれだけ抵抗しようとも足は前へ前へと進んでく。まるで誰かが俺を操ってるように、意志とは反対に襖の方へと体は近づいていった。

長い時間と人の手によって、部屋を区切る二枚の襖は既にボロボロとなっていて、扉の役割を半分くらいなしていないように感じる。だが今の俺には、その襖が本当の「線」のように感じられた。

背筋にぞくつと寒気が走る。流れていた汗が逆走する。とうとう襖まであと2、3歩までとなった。

もう後ろでなくてもいいから体を止めようと、俺は腰を落として足が歩くのを防ごうとした。下にガラスの破片があったらどうしようとも一瞬思ったが、それで立ちッぱになるほど頭は馬鹿じゃない。

俺は足から力を抜き、勢いよく畳へと腰を落とそうとした。その時だった

目の前にある襖。ちょうど俺の目の高さの部分は中の部分もグズグズに崩れ落ち、500円玉程の穴があちらの景色を覗かせていた。本来は家の廊下の壁なんかが見えるのだろうが、そこには、

「まじかよ……」

ぎょろつとこちらを覗く「目」があった。

その時、俺の体にかかる力が強くなる。今までのように「歩かされている」という感覚から「無理やり引きずられる」ような感覚へと変わった。

「ひっ！」

喉から悲鳴ともとれる声が出てくる。情けないとかだせえとか言われてられる筈もない。あの襖を超えたら、どう考えても無事では済まない！

襖の穴から見える「目」はこちらを見続けており、生気を感じさせない「人形」のような瞳が俺を見る。

その目が正しく「目の前」に来た。すると今まで静かだった襖がガタガタつと動き始め……

「うおおおおおおっ！」

叫んだと同時にあった。何かが俺の服を握ったかと思うと、グイと引っ張られていった。襖がどんどん遠くなっていく。

そして引きずり落とすかの様に部屋の外にある網戸の上に、俺の体は落ちた。

纏わりついたあのねっとりとした空気は、いつの間にか消えていた。

それから一時間くらい経っただろうか。俺は今、コンビニの雑誌を持ってぼんやりと立っていた。

あの家から脱出した後、俺は急いで駐車場に停めていた自転車を漕ぎ、あのお化け屋敷のあった下塚と我が家のある中塚の丁度真ん中にあるこのコンビニまできた。ここまで必死で自転車を回して来たからか、心臓がドクドクと派手に動いているのが聞こえた。額から汗が落ちそうになるのを手で拭う。

時計を見ると時刻は既に9時近くを刺そうとしていた。俺が下塚へ行った時も、ほとんど道路を走っている車は見かけなかったのだが、この時間になるとさらに寂しさを増し、ガラス越しに見える車道を通る車はほとんどなかった。

コンビニ内にも俺以外はアルバイトの兄ちゃんが一人いるだけで、店の中を薄汚れたモップでいかにもやる気なく床を拭いている。

あの家での体験、心底に怖かった。冷房の効いたコンビニの中でも、あの時の事を思い出すと冷や汗がわき上がってきそうになる。手に握っていた懐中電灯もいつの間にか、失くしていた。

時々、足がちゃんと動くかと足首を回して腿を上げて見る。

さて、それなのになんで俺はこんな場所で立ち読みなどしているのだろうか？

あの家でマジで怖がり、あんなのを喰らったんだからすぐにでも家に帰れば良いのに、なぜか俺は、特別読みたくもない雑誌をこうして両手に持ってぼーっと突っ立っている。

それはなぜ？ 答えは俺がむちゃくちゃにペダルを漕いでいた時、頭に微かによぎったあの言葉だった。

『帰ってくる時、あんまん買ってきてほしい。つぶあんとしあんの二つ』

我ながら下らな過ぎて力が抜けてくる。さっき死にそうに怖い事がある、必死でそこから逃げだして来たのにも関わらず、あの食い意地貼った単衣の注文を遂行しようとしているのだ。

それならばさっさと買って帰れば良いと思うのだが、コンビニで自転車を止めた時、俺は息を荒くして汗を流していたのだ。

汗をダラダラと流し、息をゼハゼハと吸いながら、

『ハッーハッー、すいません．．．あんまん二つ下さい』

と言う高校生。どう見ても変な目をされるだろ。気にしなくても良い事なのかもしれないが、なんというか．．．恥ずかしい。

そうして俺はあんまんを二つ買うために（つぶあんとしあんの二種類買ってこいと言ってた気がするが、ここにはどうやらこしあんしかないようだ）、気持ちを落ち着かせようとコンビニの中で待機していたのだった。

適当にめくっていた手元の雑誌も終わりまで来た時、再び頭をよぎったのはさっきの体験だった。しかし今度は恐怖よりも疑問が沸き出てきた。

（襖からのぞいていたあの目．．．あれは一体）

今までの事から考えると、あの家に巣食ってる「呪いの人形」だとは考えられる。しかしさらに出てきた疑問に、俺の頭はしっちゃんめっちゃかに混ぜ混ぜされた。

―襖が開こうとした瞬間、俺を引っ張ったのは誰なんだ？

正直、あれがなければ今頃あの世の住人決定だった。俺もめでたく単衣と同じのに仲間入り。だけどあの部屋に入った時、俺の体は見えない力でドンドンと中へ引き込まれていったのだ。それなのに最後、部屋から出されたわけだ。助かっただけありがたいわけだが、

どうにも納得できない、喉にさかなクンの骨が引っ掛かった気分が胸の中に沸く。

その理由を雑誌を開いたままポカンと考えていたが、ふとコンビニの前に車が止まった音に気付き、俺は雑誌を閉じた。

「・・・まあ、あちらさんの都合があったと言うワケで」

誰に言うでもなく、自分に言い聞かせるようそう呟く。そう、人間の俺がどうこう考えても、あっちはあっちで色々あるというわけ。俺がどうこうまさぐる事は何もないのだ。

体から熱も逃げ、そろそろ帰ろうと思いレジへと足を運んで行く
と、丁度自動ドアが開いて、二人の女子が入ってきた。

俺は何気なくそちらに目をやり、思わず「あっ」と口から声を漏らしてしまった。

片方は俺よりも歳が上の、大学生くらいの人だろうか。

派手なメイクがコンビニの空間に呆れるくらいマッチしておらず、不自然に茶色くなった髪の違いは違和感半端ではない。

問題は隣のもう一人の女の子であった。

俺よりも小さい背に大きめのシャツを着て、顔は隣の大学生よりも幾分「落ち着いた」化粧をしている。しかし同じ茶色に染まった髪は、高校生の彼女には十分派手さを醸し出していた。

なぜそう言えるかと言うと、俺はその女の子を知っているからだ。だってクラスメイトだもの。

あちらも俺に気付いたようで、分かりやすい程に表情を変えた。

「なんでお前がここにいる」といった感じで。俺はそれに気付いた
があえて彼女、江戸妻 えどつま 白雪 しらゆき に声を掛けた。

「ハク・・・どうしたん？こんなところで」

彼女の学校で呼ばれている愛称で呼ぶと、ハクはそれにピクリと反

応した。

「・・・別に、なんも」

ハクは自動ドアから少し離れ、こちらを見て呟くように言ってきた。見られたくないものを見られたような表情で顔を歪める。同級生に合うのがそんな嫌か。

俺はレジの方に近づきながらハクの方を見る。変わらず変な物を見るような目でこちらを見ている。

すると隣にいる女子大生がこつちとハクの方を交互に見やって大声で尋ねてきた。

「え、なになに白雪？この子誰？もしかして彼氏？」

いかにも頭悪そうに聞いてくる。なにも答えずにハクが黙ったままだったので、俺はレジで店員にあんまんを二個、そして自分用にと肉まんを頼むと「いやいや同級生ですよ」とその女子大生に言った。すると何が可笑しいのか手を叩いて、

「なにそれー！！チヨーうけんだけど！」

とかアホそうな返答が返ってきた。心の中で「うっせえ」と呟きながら、苦笑いが浮かんできた。今の何処に笑える要素があったのか、小一時間問い正したい。

そんなこと思っているとハクは「早く買お！」とその女子大生の手を引っ張って店の奥へスタスタと歩いて行った。ハクとその女子大生が動いた時、くどい程強い香水の匂いが鼻に噛みついてきた。

「ちよっと白雪!？」

女性大生は手を引かれながらもチラチラと好奇心を含んだ目をこちらに向けていたが、丁度店の店員があんまんと肉まんの入ったレジ袋を出して来たので、俺はポケットにあった財布から小銭を取りだすと、店員に払って店を出た。

（なんなんだよ一体・・・あいつあんなキャラだったか？）

ハクは学校ではいわゆる、ムードメーカーのような存在だ。明るく、誰にでも優しく接する彼女をクラス内では名前からちなんだ「ハク」という呼び名で慕われている。バスケットに入っているとは聞いた覚えがあるのだが、夏休み前に見た髪の色とは全く違う。

運動部ではなくオカルト研究会などという怪しい部に入っている俺が言うのもなんだが、体育会系の部活があんな髪を許してるだろうか？

「あれが俗に言う、『夏休みデビュー』か？」

こっちはデビューどころか危うく人生リタイヤしそうになっていたのに・・・と心の中で思いながら外へと出ると、先程やってきた車の周りに、男が3人ほど車から出ていてダベツていた。

三人とも大学生のようで、茶髪に日焼けした肌をしており、ノースリーブを着て携帯電話を片手に喋っている。

「だからよくお前の誘い方が悪かったんだろが」

「違ええよバカっ！あの時はお前が邪魔したからだろうが！」

半ばどなり声のような大ききさで話す男たちを横目で見て、俺は自転車のかごに中華まんを袋に入れて自転車にまたがった。おそらく、ハクはこいつらと来たんだなと少し残念な気持ちになってしまう。

まだ三カ月程の付き合いだが、ハクはこういう感じの奴とは遊ばないような印象を持っていた。男子特有の妄想だろうか？ ホント、女性に夢を持っている自分が少し嫌になる。

三塚町の南側にある上塚には海水浴場があるため、夏には海水浴客やサーファーなんかが来る事があり、この時期には他県から人がどっと集まる。その中にはこないかにも風な兄ちゃんたちもいるわけで、ハクがどういった経緯で知り合ったのかはわけワカメだが、今夜はこの人らとドライブにでも行くという事だろうか。

（まあ・・・俺がどうこう言えるワケもないしな）

俺は自転車のストッパーを上げると、ペダルへと体重を掛けた。先程の廃家での謎もそうだが、俺がどうこう言える立場ではないわけだ。恋人でもなく、ましてや親せきでもない、いち同級生の俺には彼女が悪い遊びにハマらない事を願う事しかできない。

自転車はゆっくりと動き始め、コンビニの敷地内を出た時に自動ドアが開き、ハクと女子大生が出てきたのが見えた。

不自然な髪をしたハクの表情がなぜか目に焼きついた。

二歩目の始め

ギシッ・・・ギシッ・・・ギッ・・・

二階へとつながる階段に体重を掛ける度、穴が開いても可笑しくない音が足元から上ってくる。幽霊がいるかどうかは分からないが、人がいなくなって大分経っているのは確かなのだろう。家の損傷が進んでいるのだ。そんな所を五人全員で上がっているのだから、音が出るのは当然か。

「おいおいおい、雰囲気出てるじゃないのこのお化け屋敷。ハハッ」

一番前を歩く健二^{けんじ}が、調子のいい口調で声を出す。こういうのに一番興味あんののは健二だ。この家に入ってから、当初の‘目的’を忘れたかのようににはしゃいでいる。

「うっわ、いろいろと描かれてるぜ。俺らよりも先に結構人来てんだなあ」

「ここ、有名な心霊スポットだからね、いかにも出そうでしょ？」

健二に続き、その後ろを善樹たちの声が聞こえてくる。途中のコンビニで女の子達に買いに行かせた懐中電灯の光であちこちを照らしながらわいわいと昇っているのだから、恐怖感もムードもどこにもない。

「肝試しにいかない？」と最初に持ちかけてきた未来^{みく}は、いかにも楽しそうにしているが。

思わず舌打ちが出そうになる。が、寸でのトコロで堪えた。不必

要な行動が女の子に嫌われるし、敏感なコだとそれだけで不信感を持たれてしまうのは長年の経験から分かっている。遊び慣れていないコには特にね。

俺はちらっと斜め後ろを向き、最後尾をついてくる彼女に声を掛けた。

「白雪ちゃん大丈夫？怖くない？」

自分の中にある「優しいお兄さん」をイメージして、出来るだけ優しい口調で尋ねる。彼女は声を掛けられて一瞬警戒するように体を止め、コチラに恐る恐るといった具合で目を向けると、それから小さく「だ、大丈夫」と答えてきた。

派手なメイクとは反対に、暗がりの中でも怯えを含む目が、改めて彼女が遊びを知らない生娘だと俺に知らせる。

今日のナンパの‘戦利品’である女子高生、名前は白雪。そして今日の俺の‘ターゲット’でもある少女だ。

昨日、俺と健二と善樹の三人で県外の海水浴場へナンパしに行こうと計画し、三塚町に到着したのは今日の昼前。

海水浴場の方では全滅だったが、夕方にダメもとで町の中を攻めていたら二人の女の子を捕まえる事が出来た。どうやら二人は地元の後輩の先輩後輩の間柄らしく、夏休み中、高校に入ったばかりの後輩を家に泊まらせて遊び回っているんだとか。ホントはもう一人いた方が数的には良かったのに・・・と思ったが贅沢は言わないでおこう。計画もなにもなく、初日で二人も捕まえる事が出来れば戦績としては上等。しかもそのうち一人は俺の好みときてる。

外見の事じゃない。何も経験していない、初であるということ。

先輩の方は未来^{ミク}って名前だっけ。いかにも遊びなれている感じだったが、後輩である彼女は正にその逆だ。車の中で、俺がちよっと肩を回しただけでもびくっと反応して距離を開けてしまうのだから。未来は『この娘、まだそういうのに免疫がないんだからヒドイ事

しないでよく?』と言っていたが・・・つまりその派手な服や化粧とは反対に、中身は真正銘「少女」であるということ。それを聞いた時、心の中にいる俺はほくそ笑んだ。

いいね。そういうコの方が‘楽しみ’がいがある。

階段も3分の2くらいの数上がったところで、前に行く三人のうち、善樹が急に大声を出した。それにつられ健二や未来も声を上げ、後ろの俺もビクツと体を強張らせる。

「おおおおお!! なんだよこれっ!」

「きゃあああっ、何!? って只の落書きじゃーん!!」

「おつめえはホントビビりだなこの野郎。でけえ声出すなよ!」

「う、うるっせえな! 勘違いしただけだよ!」

善樹は誤魔化そうと無意味に声を張り上げるが、根っからの小心者であることは俺たちの中では既に把握済みだ。以前、夜中にホラー映画の観賞会をした時は、「面白そうじゃん」とか言っておきながら、いの一番に叫び声をあげてたんだからよ。

その後も何度か、「うおっ!!?」、「キャア! なによ!?」とワイワイと騒ぎながら階段を踏みしめていく。俺は後ろについてくる彼女に振りかえり、また声を掛けた。

「ハハハ、前は盛り上がってるね」

「.....」

しかし、彼女は俺の独り言かと思ったのか知らないが、返答は返ってこなかった。

ちっ、黙んまりかよ。また舌打ちしそうになったがグツと堪える。誘った時もそうだったが、このコはイマイチ「ノリ」が悪い。俺らが年上だからとも考えたが、会ってから時間が経っても、彼女は楽しそうな顔を見せてない。俺らを警戒しているのか？今日、カラオケやらメシ代なんかに使っている金は俺らが全部払ってるってのによ。

まあ、いいさ。俺は俺で、払った金の分は「楽し」ませてもらうから。

正直、ここが心靈スポットだろうがなんだろうがどうでもよかった。彼女と二人きりになる。それが俺の大切なことだった。

健二や善樹、それに彼女の先輩である未来も一緒に二階へと向かっているわけだが、こいつらは探索のほうに夢中になってる。まあ、お前らはお前らで楽しんでくれればいいさ。

ちゃんと『打ち合わせ』通りにしてくれよ？

なくに、多少強引にいつても、後でどうにもなる。もしなにか言われても、はぐらかすなり逆切れでもすればいいさ。

（うわ、俺って鬼畜）

舌打ちの代わりにフフと笑いが起こりそうになる。その時、前を歩く健二の方から声が上がった。二階へと着いたらしい。

「到着・・・と」

健二と善樹が懐中電灯をゆっくりと動かして中の様子を映し出す。壁に窓らしきものが見えたが、外の光は入っては来ない様で、闇だけを家に入れていた。

廊下はスルスルとのびて左右に折れ曲がり、散乱したゴミがカサカサと音を立てている。

正面には部屋へと繋がっていきそうなドアが、落書きと埃で汚れながらも壁に張り付いている。左側は手前の壁に遮られて見えないが、右の方には和室だろうと思われる襖がボロボロになっても、かろうじて立っていた。

何処にでもあるような一般的な家の間取りである。違うのは人が住む気配がないことだ。

先ほどまでは色々と話していた三人も、不気味な雰囲気を感じ取ったのか、先程よりも会話の声は低い。健二は正面のドアを照らしながら、俺らに確認するように声を出した。

「よ、よおし．．．んじゃ、正面の部屋に入ってみるか」

「マジで？うわぁ、何か出てきそー」

独りでに意を決した健二に、善樹が懐中電灯で正面のドアを照らしながらゆっくりと近づいていく。その後ろを未来と俺、そして彼女がついていく。

ドアにはなにやら訳のわからない文字や絵が描かれ、ドアノブには埃が生き物のようにまとわりついていかにも汚い。「うわっ、きったねえな」と健二は愚痴りながらドアノブをひねり、ゆっくりとドアを動かした。

ギギギッと鈍く、金具の錆びた音が背筋を流れる。部屋の中で籠っていた空気が飛び出し、前髪を吹いた。

思わず鼻を押さえる。なんだ、今の臭いは？

「おじやましまあす」

今更のように健二が言うと、全員でゆっくりと部屋の中へと入っていた。誰かは知らないが、ごくりと唾を飲む音が響いた。

部屋は6畳程度の洋室でかなり荒れていた。壁はボロボロと崩れており、壁紙は？がれて、木が飛び出ているところも見える。

既に持ち主のなくなったベッドにはもちろんシーツや布団などはなく、灰色のマットレスだけが、骨組みにはまっているだけだ。学習机にはノートの代わりに、誰が置いたのか分からないようなゴミや木の破片が散乱していた。この家の、息子か誰かの部屋だったのだろうか。

健二や善樹はそこいらを調べるように懐中電灯をあて、乱暴に壁を蹴ったりしている。未来は健二の横に陣取り、懐中電灯の当たった場所を興味津々といった具合で観察している。そして彼女はというと、何をするわけでもなく、なんとなしに視線を部屋の中に泳がせていた。

・・・ここならいいかな

俺は手に持っていた懐中電灯を消した。一本分の光源が無くなった分暗くなり、未来がキャツと悲鳴を上げたのが聞こえたが、すぐに明かりを点け直す。

「わりいわりい、間違って消しちゃった」

「おいおい頼むぜ隆。霊の仕業かと思っちゃったじゃん」

健二が軽口を叩いて俺を茶化したのが、ぼんやりと浮かんだ健二の顔が、ウインクしたのが見えた。『合図』は伝わった。善樹の方にも視線を移すと、わずかだが、顎をひいて頷いて見せた。こちらも

OKのようだ。

「だ、けどどよ、見たところなんもねえじゃん。ちょっと拍子抜けだぜ」

半ばイライラしているかのように善樹が壁を蹴りながら言う。さっきまで大声をあげて階段を上ってたヤツはだれだったの。そんな時、未来がボソリと呟いた。

「話によるとさ．．．この家には呪いの人形ってものが何処かにあるんだって」

わざとらしい低い口調で喋る未来に、善樹と健二は体を向ける。なんだ、その何処にでもありそうな話は。

「の、呪いの人形？なんだよそれ」

「なんでも白い髪の毛、西洋風の人形なんだって。それでさ、それを見つけた人はその人形に崇られて．．．」

「死んじゃうってか？」

健二が言ったセリフで、一瞬辺りに沈黙が生まれる。しかし直後、健二からハッと鼻で笑うような音がでた後に、

「ほうほう呪いの人形ねーいいじゃん、面白そうじゃん。んじゃ、その人形を探しに次の部屋にいけますか」

未来の話に俄然興味を持ったかのように、健二は早足でドアを開いて部屋から出ていく。それに続いて楽しそうに未来が後にならう。

「ちょ、待てよ！」

善樹は慌てて部屋を出ようとするが、床に散らばっていたごみに足を取られそうになりながら、転がりそうになりながら部屋の外へと出て行った。そしてまだ部屋には俺と彼女がいるにも関わらず、乱暴にドアを閉めてしまった。

暗い部屋に俺と彼女が取り残される。

この時だ。

ドアを閉められたことで一瞬ビクッと体を縮めた彼女であったが、3人についていこうと部屋を出ようとしたが、ドアノブに伸ばした手を俺の手が掴んだ。

「な、なに？」

訳が分からないような表情をこちらに向けてくるが、そんなのはお構いなく、俺はさっと彼女を引っ張ると回り込むように位置を変えた。

これで俺は彼女とドアに挟まれるようになる。つまり、彼女は俺を超えていかないと部屋を出れないワケとなった。

よしよしさっき三人で『打ち合わせ』をしていたから上手くいったよ。

―俺がこのコで、二人は未来の方。場所が良い具合なら作戦開始ね。

「大丈夫、怖くないから。安心して」

3人が部屋から離れるのが遠のく足音で分かった。俺は掴んでいた彼女の手をグイッと引き寄せる。

宥めるように話しかけるが、白雪はまるで聞いてないといった具

合で後ろへと下がろうとする。その顔はTV番組でよく見る、悪役に捕まったヒロインのようだ。

おいおい、そんな顔で見るなよ。まるでお兄さんが悪者みたいじゃない？

「大丈夫だって、ホント大丈夫だから。ね？白雪ちゃんは俺の事嫌い？」

「いや、離して」

「ちっ」

ああ、思わず舌打ちが出てしまった。どちらかというと俺もあんまり強引には行きたくないんだけどね。どうせなら、お互いいい気持で終わりたいじゃん？ただどまあ、あんまり聞き分けのないコにはお仕置きしないとね？

俺は彼女の腕を握った手に徐々に力を入れていく。これに彼女も驚いたようで、まるで誘拐犯にでも捕まったかのような表情をこちらに向けてくる。

騒がれる前に後ろへと押して、埃だらけのベッドに倒す。おおっと、落ち着けよ俺。手に持っていた懐中電灯を脇に置き、彼女の肩を押さえた。

「い、やだ。やめて」

まあだ騒ぐか。いい加減に諦めればいいのに。

「騒いでも聞こえないよ白雪ちゃん。それに、なんだかんだって君もその気だろ？」

口調は優しくしたつもりだが、彼女の顔には絶望したような表情が浮かんでいた。自分でもほれられするような悪役のセリフだったなど感心する。

これくらいの歳のコには結構効く訳で・・・まあ、その後の心証は最悪になるが、どうせ二度と来ない町だしな。

うわ、俺ってホント、鬼畜だな。

自分でも悪そうに顔が笑っているのが分かる。未だに嫌がる彼女の顔を、俺は片方の手で押さえつける。そして彼女の唇に顔を近づけて・・・

「いやあっ!!」

瞬間、俺のこめかみに衝撃が走った。視界の中に光が飛ぶ。イメージ的な話じゃない。懐中電灯をぶつけられて、光が部屋の中で暴れたのだ。

思わず彼女を掴んでいた力が緩んでしまい、体勢を直す前にみぞおちへと衝撃が続く。

「がっ!」

彼女の伸びた足が見え、みぞおちを蹴られたのが分かった。後ろによろめいた拍子に何かに躓き尻もちをついてしまった。ガシャガシャと、床に転がっていたゴミが音を鳴らす。

立ちあがろうとする俺の横を、彼女、白雪が通り過ぎていった。

「てめ、待てよッ!」

引きとめようと声を上げたがそんなのはお構いなしに（当然だろうな）彼女はドアを開くと廊下に出ていった。立ちあがった時には既に階段を駆け下りており、ギシギシギシッと階段を軋ませる

音が聞こえてきた。

すぐに廊下へと出たが、彼女の姿は何処にもない。すでに階下へと降りていったようだ。

「うっわ、マジかよ・・・うぜえな」

最悪だ。何もやらないで逃げ出されるなんて・・・

体についた埃がイラつく。くそっ！これから追うか？いや、下手に追ってケーサツなんかに行かれたら不味いことになるしな。町から出た方がいいか？

ちっ、クソガキが・・・

イライラとしながら口の中で愚痴を零す。そして膝についた埃を払っていると、ふと、違和感を覚えた。

「あれ？」

アチコチに振り向いているが、廊下には先程の争いを消すかの様に静まりかえり、出てきた部屋から洩れる懐中電灯の光だけが、闇の中を照らしているだけだ。

あいつらは？健二に善樹、それにあいつらについていった未来は？

「おい健二、善樹！何処にいんだよ！！？」

大声で二人を呼ぶが、それに反してくれる返事は物音すらも聞こえては来ず、俺の叫び声が僅かに家の中で反響して、元の静けさに戻った。

あいつらまさか、外に出たのか？いや、それなら外からなんか聞こえてくる筈だ。

さっきまでは5人で騒いでいた家の中は、まるで別世界のように静まっている。

いや、‘静か過ぎ’。自分の呼吸音すらも、闇の中に吸い込まれていく感じがする。

今まで感じなかった恐怖感が、アリが這い上がってくるかのように、足元からジワジワと俺の体を侵していく。ヤバイ。すぐに出ない。

すぐにでも階段を下りればいいのに、そこで俺は部屋に残した懐中電灯を思い出した。こんな時だ。安っぽい灯りでもそれに縋りたい。開けっ放しにしていたドアの方に視線を移す。

俺は息を呑んだ。

懐中電灯の光を背に、女がいた。

はっ？なんだよこれ

誰に言うでもない言葉が口から出そうになった時、耳元で聞こえた。

一緒にいてええ

最後、俺の目に見えたのは女の歪んだ「笑顔」だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9682v/>

キモノノケモノ ～白い髪～

2012年1月11日10時48分発行